

第五章 ブラジルコーヒーの由来

恋物語が生んだブラジルコーヒー

どの様にしてコーヒーがブラジルに入ってきたのか。

コーヒーがヨーロッパにもたらされたのは古いことで、盛んになるのが18世紀に於いて、オランダ人がジャバ島で栽培するようになってからである。

南米には18世紀の始め、フランス領ギアナに移植されたのが最初である。

ある1人のブラジル青年探検家が、アマゾン河口のベレンからすぐ先の北フランス領ギアナ（当時）へ渡ったことから始まった。

青年探検家のフランシスコ・デ・メロ・バリエタはギアナとの国境地帯の現状を、調査している内にフランス総監督夫人と巡り合い、熱烈な恋愛におちいった。月日が過ぎ彼がブラジルへいよいよ帰国する当日、総監督夫人はこっそりと禁制のコーヒーの苗木と種粒を持たせてくれた。このようにロマンがらみにして、ブラジルに運ばれた最初のコーヒーが1729年頃であった。

その持ち込まれた苗木、種粒がパラ州地方（アマゾン河口）に移植、気候に馴染みながら次第に南部方面に南下バイア州などを経由してリオ州へ、しかし当時この地方では金鉱採掘の盛んな時代、コーヒー栽培など考えるものはなく、僅か家庭用に植える程度であった。それがリオ・デ・ジャネイロの商人達の進めで、コーヒー園と名乗れるように栽培者が現れたのが19世紀の初期であった

19世紀に入ると本格的に栽培され貿易商品として重要視され、政府もコーヒーに力を入れ、リオ近郊のパライバ河川岸が最も栽培が盛んであった。この場所はミナス州の金鉱地帯から移った人々が、多く集まり大規模に始めだす。

ヨーロッパに於ける消費量の増大に併せて輸出量は年毎に激増し、1850年には遂にジャバ島を追い越し、その生産量は世界の50%を占めるものであった。

1868年～1875年にかけて、サントス港とサン・パウロ州北東地方を結ぶ鉄道路線が開通。サン・パウロ州の地方にも試作が始められ、テラ・ロッシャの肥沃なモジアナ地方で本格的に植え付けられる。

コーヒー農場では砂糖キビ地帯で不要となった奴隷を買い取って栽培面積の拡大をはかる。1850年～1870年にかけて、各地からコーヒー地帯へ売られた奴隷は、毎年3万人を超えたと云われた。

以後黒い宝石と云われ、ブラジルの代表産物であり、国の経済を担うものになる。

「目覚めた大国ブラジル」・鈴木孝憲著引用

「ブラジル百科事典」・山路舜一著引用



ブエノス・アエレス～アンデスを運行する列車（南米農業開発の回想より転載）